◉連合会だより

123運動も最終盤を迎え、1年間を振り返り次年度の方針を明確にしなければならない時期に入ってきた。

高齢者協同組合の設立は、三重、沖縄、愛知、福岡についで、長野、山形、神奈川、熊本、兵庫、北海道と総会までの間にびっしりと計画されている。参加してきている高齢者の層は実に多様だが、たまり場、話し相手がほしいという要求はどこでも最大のものだ。それは、社会の役に立ちたい、働きたいという要望にも通じている。高齢者が元気になるキーポイントは、働くということにある。高齢者協同組合の飛躍は、高齢者の就労要求の全社会的実現、新たな高齢者就労のシステムづくりが、公共と協同が地域に根ざしていかに作りあげていくかにかかっている。地域の事業団の経験と新たに結集した人たちの創意とセンター事業団の若き力が総合的に、労働省や自治体との政策をしっかりと切り結んでいく必要がある。

高齢者協同組合の発展の中で、多くの団体が連合会に加盟するとともに、協力関係に入った団体・個人も飛躍的に増えたのが今期の大きな特徴でもある。その動きは、住専や京都市長選挙でも現れている支配構造の崩壊の中で、人＝命ということを起点に新たな価値観や社会的枠組みを多くの人々が求め実践を始めており、もうけ本位の経済との対抗軸として労働者協同組合を位置づけ取り組んできたわれわれとの接点が、急激に拡大してきていることの明かしであるといえよう。

こうした動きは21世紀の非営利・協同の時代へ、その大連合を予感させるものとなってきているが、企業体そのもののあり方、社会的責任のありようとも関わり、人＝生命、地域、環境を基調にした経済連合といったものに発展していくのではないだろうか。**鍛谷　宗孝**（連合会・専務理事）

◉センター事業団だより

大病院への行動で大いに盛り上がった1・2・3運動も残り1カ月を切った。仕事を増やすことの大変さとおもしろさに気づかされる。大変さとは、まだまだ未確定の物件が多く、年間を通じた粘り強さが求められたり、相手を説得し納得させること、つまりどれだけ労協が語れるか、である。また、取れた後の立ち上げの苦労や安定への道のりは、新しい組織づくりであるが故に、苦労は付き物となる。しかし、実はここにおもしろさややりがいが潜んでいる。反応の良さや関心の高さという、今の時代とのマッチングという実感であるが、苦労を通して見ると、この実感こそが組合員や事務局員のやりがい・元気の素であらねばならないと思う。

ほとんどのことが自他ともに初めてのこと。根元的な「初めて」のおもしろさは、人の変化や充実感ではなかろうか。しかも、それが自分にとって希望の道・挑戦の道であることと、社会の必要・有用と結んだとき、多大なエネルギーとなり自信となっていくものである。その意味で多くの所長・幹部がこのおもしろさに向かって初めての挑戦をしてることは意味重きことだ。しかし、仕事が増え、立ち上げて初めてそれは本物となり得るなら、もう一踏ん張り二踏ん張りせねばならない。その先もある。終着地へ向かっての意志やエネルギーの継続は何に寄って立つべきなのか。

実は、最近若手の事務局員の退職が続き、「何のために」という動機付け、「何に向かって」という目標が、今一人一人に問われている。己のアイデンティティを形成する根元，いや根元の形成かもしれない。私の根元は「劣等感」と「充実感」と「怒り」だったように思う。「おもしろきこともなき世をおもしろく」と辞世の句をうたった高杉晋作は、志半ばで倒れた。それでもおもしろき世と思えたとすると、結果も大事だが、プロセスとしての今を、「世」という視点から、問い直してみたい。時代はそんな時のような気がする。

古村　伸宏（センター事業団・事務局長）